

新たなる思いを胸に

— 社会科学研究所北京合宿に参加して —

専修大学大学院博士後期課程 施 錦 芳

今年3月に専修大学社会科学研究所の北京春期合宿で、中国社会科学院都市発展環境研究センターとの研究会の通訳を担当させていただいた。実は、2年前の同じ時期に、泉武夫先生のご紹介で、中国雲南省で開かれた本学社会科学研究所と雲南大学との学術交流会の通訳を初めて担当させてもらった。二回の研究会にわたって通訳を経験させてもらったことを契機に、日中関係、交流について、新たなる思いを胸に抱いた。

雲南訪問の際に専修大学が主催した答礼宴に、当時の社会科学研究所長の古川純先生が以下のように述べた。「今回の雲南訪問・調査にあたって、見学したところや交流していただいた皆さんから受けた暖かい対応に感謝する。『一衣帯水』という言葉があり、今晚はその意味を『心』と『舌』で感じながら、皆さんとの交流の機会を楽しみたい。」

確かに、中国には「一衣帯水」ということわざがある。意味は隔たっていてもそのことが互いの往来の防げとはならないということである。日中両国についてよく「一衣帯水の隣国」と言われている。この言葉を聞いて皆さんは何を考えるだろうか。それこそ日本と中国は、地理的に隣接し、政治的、歴史のおよび文化的に密接な関係にあるから、「一衣帯水」という表現は日中関係に最もふさわしい言葉であると私は考える。

今回の北京合宿にあたって、3月14、15日の研究会の際に、中国側7名の学者と専修大学側5名の学者によって、両国社会における総合的、科学的な分析がなされた。双方の研究者達は、激論を闘わし、日中社会に対する理解を深めた。所長の柴田弘捷先生は、「日中友好関係を作り、持続させていくために、人を知るということは大事である。人を知るために、お互いに対面し、話し合い、手を握り合う事が一番である」と語った。

3月16日に北京経済技術開発区にある北京同仁堂製薬会社を見学した。その後、ちょうど時間の余裕があって、北京経済技術開発区管理委員会を見学することもできた。事前連絡なしに、突然の訪問だった。外事弁公室の責任者である李中州さんが、日本語版の北京経済技術開発区パンフレットを用意して下さって、暖かく接待して下さいました。李さんは30代の明るい方で、挨拶の一言が我々の心に深く印象づけられた。「両国の政府の間いくつかの問題が存在しても、個人として日中関係をよくするために努力すると共に、日本人は北京経済技術開発区への見学、投資などに大いに協力していただきたい」と彼が述べた。

最近、日中両国の間に多くの不安定なことが起っている。現在両国間の経済発展が急速に進

んでいる一方で、政治の面にはいくつかの問題がまだ解決されてない。「政冷経熱」とも言われている。我々は、どのようにして、日本と中国の交流を深めていけばよいのだろうか。まず、常に互いに理解しあい、他人の長所を取り入れ、自分の短所を補うことが大事である。次に、二つの国のことを深く研究し、知ろうとするきっかけを作らなければならない、と私は考える。このようなシンポジウムを持ちながら、情報の公開を促進し、偏見を捨てて、日中の交流を深めていきたいと新たに思う。

2005年4月14日